

第27回 日本意識障害学会

大阪医科大学 脳神経外科学教室 名誉教授

黒岩 敏彦

平成30年7月20日、21日の両日、豊中市千里ライフサイエンスセンターにおいて第27回日本意識障害学会(会長 黒岩敏彦)を主催させていただいた。近年の医療環境の発展をもってしても意識障害という病態には挑戦すべきことが極めて多く、学会テーマを「意識・意識障害への挑戦」とした。本学会は医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語療法士など多職種の医療従事者のみならず、患者さんとご家族まで参加され、意識および意識障害について深く議論する特色ある会として発展してきたが、今回の学会においても医師172名、看護師を含むその他の医療従事者256名、患者さんおよびご家族131名計559名にご参会いただき、学会の目的を達成できたと考えている。

本邦の遷延性意識障害患者さんの医療、看護ケア、患者支援の現状および世界の趨勢の理解を深めるために、本邦患者家族会代表者およびポーランドにて家族会 NGO団体「AKOGO」を主催されているEwa Błaszczuk氏、そしてその会を支援されているUniversity of Warmia and Mazury in Olsztyn 脳神経外科 Wojciech Maksymowicz教授を招聘しご講演いただいた。意識のメカニズムについて、吉田正俊先生(生理学研究所認知行動発達研究部門)に「意識の神経相関」と題して、苧坂直行先生(国立研究開発法人情報通信研究機構 脳情報通信融合研究センター)に「ワーキングメモリと意識」と題して特別講演をお願いした。また、意識については立場により定義に差があることから、様々な学

術分野(心理学・哲学・脳神経外科学・精神神経科学)のエキスパートからもご講演いただき、本学からも精神神経科の米田 博教授にご講演いただいた。意識障害程度をを図る尺度としての様々な意識障害スケールについても、特別講演、特別企画で参会者に理解を深めていただいた。遷延性意識障害の患者さんにおいても在宅医療が推進される状況であり、患者さんご家族、そして遷延性意識障害患者の在宅医療に携わる医療従事者の要望もあり、本学会開催に先立って「遷延性意識障害患者家族・医療従事者のための在宅医療・ケアサポートブック」(メディカ出版)を上梓し、学会中も在宅医療に関するシンポジウムを組んだ。その他、「意識障害学会脳神経看護実践セミナー」を開催し、それぞれの分野の看護・ケアのエキスパートの先生方より講演いただき、看護師のみならず、患者さんご家族にもセミナーに参加していただいた。共催セミナーとしては、「第35回PNLS(Primary Neurosurgical Life Support)コース」「第25回PNLSインストラクターワークショップ」「神経集中治療ハンズオン」を開催した。

その他、ランチョンセミナー 3演題、シンポジウム4セッション、一般講演8セッションを組み、活発にご議論いただいた。

本学会をとおして急性期意識障害から遷延性を含む慢性期意識障害まで、診断、治療から看護、ケア、リハビリに至るまで幅広く、十分な議論ができたものとする。

